

## ビザンツ帝国

### ●イスタンプルの旧名は

ギリシア神話は、海神ポセイドンが土地の女ケロエッサに生ませた子ビュザスが、太陽神アポロンの助けでこの町を作ったと伝える。すなわちギリシア名でビサンティウム、現在トルコの商都イスタンプルである。ケロエッサは“角の女”の意味で、この町の北側に切れ込む入江の擬人化であって、後代、この入江自体が“金の角（ゴールドエン・ホーン）”すなわち“金角湾”と呼ばれるようになった。

紀元前8世紀以降、ギリシア人は黒海方面に植民した。ボスポラス海峡に位置するこの町も、紀元前7世紀、メガラによって植民された。この町出身の航海者ビュザスによる建設とする伝えもある。そうしてローマ人がやってきた。紀元3世紀、軍人皇帝時代、町はローマふうに変えた。4世紀、皇帝コンスタンティヌスはこの町を帝国の首都とした。コンスタンティヌスのポリス、すなわちコンスタンティノーブルである。

ローマ帝国は滅びたのではなかった。ビザンツ帝国として、なお一千年の余命を保ったのである。ユスティニアヌス帝以後、帝国の体質は変わった。古代ローマ的な体質から中世的ギリシア的体質への変化である。シリア方面はイスラム政権に奪われ、バルカン半島にもブルガール人等諸民族の動きが激しい。しかし、首都コンスタンティノーブルは国際貿易の結節点として繁栄し、東方教会の総主教座を守る。帝国の一千年は古代と中世のはざま、東方と西方の境界であった。

- 476 西ローマ帝国滅亡
- 527 ユスティニアヌス帝 ~65
- 610 ヘラクリウス帝 ~41
- 661 ウマイヤ朝成立
- 678 ウマイヤ朝の攻撃から首都を防衛
- 726 聖像禁止令
- 843 聖像破壊令の撤回
- 989 ルス、ギリシア正教に改宗
- 1054 東西教会の分離
- 1097 第1次十字軍(1096~99)が帝国領土を通過する
- 1203 第4次十字軍(1202~04)がラテン帝国を建てる
- 1261 ラテン帝国崩壊・ビザンツ帝国再興

## 1453 ビザンツ帝国滅亡

### 1 ビザンツ帝国の成立

ビザンツ帝国は旧ローマ帝国の東方領土である。5世紀末、西ローマ帝国が滅亡し、ローマ帝国の西方領土各地にゲルマン人国家が樹立されてのち、ローマ帝国はコンスタンティノープルの政権の支配するビザンツ帝国として存続した。

はじめ領土はエジプト、シリア、小アジア、バルカンに広がっていて、6世紀のユスティニアヌス帝の代には、一時アフリカ、ヒスパニアの一部、イタリアの大半を押さえ、旧ローマ領のほとんどを回復したかに見えた（ユスティニアヌスの再征服）。

そのころまでは国家社会の仕組みも旧ローマ帝国の時代と変わらず、都市を拠点とする属州支配、それら諸都市を結ぶ地中海貿易、コロヌス（隷属的小作農）を使役する大農園経営という旧ローマ社会の活動形態をそのまま維持しようとする努力が払われていた。

ところがユスティニアヌス以後、帝国は大きくゆさぶりをかけられる。アヴァール人、スラヴ諸族がバルカンを荒らし、ササン朝ペルシアが東から迫る。イタリアにはランゴバルド人の国家が成立した。この危機を凌いだのがヘラクリウス帝（610～42）である。この皇帝の時代が、善かれ悪しかれ帝国の転回点であった。古代的体質が精算されて、新しい状況に即応した諸制度が工夫された。

たとえば“テマ制”である。“テマ”は軍管区を意味する。はじめは一万人でいどの軍隊を辺境において、長官に行政権まで行使させた。兵士には土地を与え、農兵としてその土地に定着せしめた。開墾と植民が促進された。昔のコロヌスとはちがう自由土地保有農民が広く形成され、かれらが帝国の軍事と経済の担い手となった。この制度は9世紀以降、マケドニア朝の時代に整備され、“テマ”は帝国の地方行政単位となった。

しかしヘラクリウス帝の末年、新手の脅威アラブ帝国がシリア、エジプトを併呑し、やがて661年に成立したウマイヤ朝はダマスクスに都した。ローマ人に代わるアラブ人の近東支配が確定したのである。東地中海世界における古代ローマ帝国の終末である。

コンスタンティノープルの政権の支配地は小アジアとバルカンに限定された。これはギリシア人の世界である。人々はギリシア語を話す。8世紀に入れば公用語もギリシア語に切り替えられた。コンスタンティノープルの古名であるギリシア名ビザンティウムに因んで、この帝国を後代“ビザンツ帝国”と呼ぶようになったのも理由のあることであった。なお“ビザンツ”はドイツ語読みであって、ふつう英語読みで“ビサンティン”と呼ぶ。

## 2 周辺の諸民族

アラブ帝国に対しては小アジアのタルソスから黒海東端にいたる線をおおよそその境界とすることで決着がついた。次の問題はバルカンへのブルガール人の進出であった。

ヴォルガ川下流からドナウ河口に移住したブルガール人は、9世紀に入るとドナウ南岸のトラキアに進出し、南スラヴ人のセルビア人と共住混血して、だいにスラヴ化した。一時はコンスタンティノーブルの城壁をうかがうほどであったが、9世紀中にキリスト教を受容し、コンスタンティノーブル総主教の管轄下にあるギリシア正教を国教とする王国として安定した。

10世紀にはルス、すなわちロシア人が南下した。原住民の東スラヴ人と混血し、スラヴ化の進んでいたルスは、同世紀に入ること、キエフの首長の下に国家的結合を作り上げた。同世紀末、ビザンツ皇帝バシレイオスは、キエフ公国に対して融和策をとり、キエフ大公ウラジミールとビザンツ皇妹アンナと結婚せしめるという一場のドラマを演出して、ルスをギリシア正教に改宗せしめることに成功した。ルスはビザンツ文化圏に入った。後代、ギリシア正教がロシアのキリスト教として展開するための布石が打たれたのである。

11世紀に入り、バルカンにおいてはブルガリア王国を併呑し、ふたたび北境をドナウ川にもどすなど優勢であったが、アラブ帝国の政権を掌握したセルジューク＝トルコ族が小アジアに脅威を及ぼす。これに対抗する方策の一つとして、同世紀末、コンスタンティノーブルの政権はローマ教皇に助力を依頼した。これに対するヨーロッパ側の対応が十字軍遠征であった。ビザンツ側にしてみれば、これもまた帝国の領土を侵す新手の周辺民族にほかならない面もあった。13世紀初頭には、一時十字軍に首都を占領された帝政府は小アジアのニケーアに移る。“ニケーア帝国”は同世紀なかばまで続いた。

13世紀後半、新たにセルビアがバルカンの覇権を握り、小アジアでは、オスマン＝トルコの圧迫が強まる。そうして15世紀なかば、弱体化したビザンツ帝国はオスマン＝トルコの攻撃の前に、首都コンスタンティノーブルを明け渡したのであった。

## 3 宗教・社会・文化

### (1) 聖像破壊問題

十字軍直前、ビザンツ帝国のキリスト教会はローマ＝カトリック教会と断交した。たがいに破門を宣告しあったのである。それまでは、キリスト教会は一つと考えられていたということであったが、じっさいは教会制度、教義内容、国家権力との関係などにおいて、すでにかんがいのちがいが生じていた。

世俗の国家権力から相対的に自立していたローマ教会に対して、ビザンツ教会のばあい、コンスタンティノーブル総主教は皇帝の任免権に服し、教会会議の召集権も皇帝の手中にあった。皇帝は事実上教会の首長であり、この体制は皇帝教皇主義という。

8世紀のイサウルス朝のレオ3世は聖像破壊令を公布したが、これは皇帝が教会の問題に介入した最大の事例である（イコノクラスム）。キリストの画像をはじめ全ての宗教的画像（イコン）の制作・所持・礼拝を禁じたこの勅令は、長い闘争の果てに、一世紀ののち、ようやく撤回された。神的なものを像に作るというのはギリシア的であり、聖像否定はオリエント的である。イスラム教は聖像を否定している。ビザンツ教会は、この点に関して、ローマ教会と同一歩調をとるものであることを明らかにした。

## （2）国際商業と首都コンスタンティノーブル

十字軍以後、コンスタンティノーブルの市場にひかれて、ヴェネツィア商人をはじめ北イタリアの商人たちがやってきた。最盛期にはヴェネツィア人だけで2万人いたという。コンスタンティノーブルの都市人口は最大20万から30万のあいだであったと推定されるから、じつにその一割である。

これはしかし新参者にすぎない。ユスティニアヌス帝の時代から帝国の首都はギリシア人、ブルガール人、ユダヤ人、ロシア人、アラブ人、ペルシア人…と、多種多様な民族の商人たちをひきつけてきた。コンスタンティノーブルの市場は東洋の絹、香辛料をはじめ、これらの外国商人のもたらす商品の取引場であり、絹織物、武器製造など、国家的に管理される職人ギルドの製造する商品の売場であった。

ビザンツの金貨ノミマスは、アラブ帝国の銀貨とともに、国際貿易におけるもっとも安定した交換手段であった。これら金銀貨が北のバルト沿海、ヨーロッパ内陸、スペインなどに大量に出土する事実は、ビザンツ商業圏とアラブ商業圏とを結ぶ太いパイプから延びた国際商業ルートがルスを介してバルト沿海へ、そこからヴァイキングを介してフランク王国へ、フランク商人を介してイスラム＝スペインへと、大きな円環を形成していたことを示している。

## （3）文学と美術

6世紀のユスティニアヌス帝の時代は“ローマ法大全”と“ハギア＝ソフィア（聖ソフィア聖堂）”を後代に残した。前者は古代ローマ法の集大成であって、11世紀以降、ヨーロッパ社会に成文法のモデルを提供した。後者は古代ローマのバシリカ（切妻屋根の長屋式会堂）様式と西アジアに起源をもつクーポラ（円屋根建築）様式との合成であって、これはまたヨーロッパの教

会堂建築に影響を及ぼした。

法律と建築、これは古代ローマ人の得意とした分野であって、だからこれは古代ローマの文化遺産の継承発展である。9世紀以降、マケドニア朝の時代にビザンツ文化は再興期を迎えたといわれているが、総じてこの時期の学芸は前代までの著述の要約・抜粋・百科全集ふうの集成に精力が注がれている。総主教フォティオスの著述「ミリオビブロン」は“無数の書物”の意味であって、古今の書物の広範なダイジェストである。

ギリシア・ローマの古典を古典ギリシア語文献の形で保存し、これをヨーロッパ社会に引き渡したことの意義がしばしば強調されるが、それは14世紀以降のことであって、十字軍前後、むしろ商業実務と軍事技術の分野において、ビザンツはヨーロッパの教師であった。